

■ 樹木を育てる日常

里山の疲弊に抗うために

ファナ地域では、都市への薪炭材の供給、人口増加による農地開発、都市住民への土地の分譲など、これまで農民の生活を支えてきた里山が疲弊しています。こうした里山を再生するために、村人の手で樹木を育てていく必要があります。私たちは自身で苗木を作り、植え育て、使うことのできる人材を育ててきました。

2015年に第1回の研修を始めてから来年で10年を迎えますが、多くの村々で里山を再生する「実践者」が育ってきています。この里山を再生すると謳った活動を始めた当初からは、里山をめぐる多くの変化が起きている。日々の生活に使用する薪炭を得るのも苦勞するようになり、村人の間からも植樹の重要性が聞かれるようになっていきます。



自由に使える里山が減っている

地域の先駆者に学ぶ（第1ステージ）

ファナ地域には多くの地域苗畑主がおり、彼らのもとで村人に配布する苗木を購入していました。彼らは樹木の苗木を育てるだけでなく、それを自身の里山に植えて育て、うまく利用しています。そうした技術や経験を学んでもらおうと、関心のある村人を連れて行き

研修を行いました。

2015年からの4年間で8ヵ村27人が研修を受けました。その後学んだ技術を活かして、自身の里山で育苗し、樹木の育成していきました。様々な理由で脱落者が出ていますが、現在でも17名が継続して育苗し、里山再生の実践を続けています。



シーズンオフの乾期でも育苗する実践者

先輩実践者と共に学ぶ（第2ステージ）

2021年からは3年にわたり、育った実践者の周辺で興味を持つ村人の中から「新実践者」を選抜して、実践者と同様に、自身で育苗し、植え育て、利用できる人材を育てました。新実践者は、経験を積んだ先輩実践者のサポートを受けて、育苗や植樹の技術を学びながら、実践していきました。実践者の周りに、里山再生を担う仲間を増やし、地域全体で里山再生を実践していこうという狙いがありました。

先駆者の成果が手本（交流）

実践者・新実践者を育てていく中で、先輩である地域苗畑主や実践者の里山を訪ね、彼らが実践してきた成果（育った樹木や土地の活用方法など）を見ることで、自身が行う実践のヒントとなるような交流を行いました。

まさに新実践者たちがぶつかっている問題の

解決方法や様々なアイデアなどを活発に交換できる場として非常に有意義であると感じています。また、こうした緩やかな繋がりが地域の里山再生につながっていくことにも期待しています。



多くの訪問者の手本となったカイセドラの林

新実践者のもとで学ぶ（第3ステージ）

今年からは、3年間経験を積んできた新実践者のもとで、同村や隣村の村人を対象にして、育苗や植栽の勉強会を行っています。もっと広く村人が木の育て方を学ぶ機会を増やすことを目指しています。これらの勉強会には実践者や新実践者の育成の時には拾い上げられなかった女性が多く参加できるようになりました。他村への移動もなく、気軽に参加できたことが女性の参加につながったようです。



乾期植栽の勉強会

また、樹木の育成に明るい人材が同じ村にいても、村人が学ぶ環境として良いことだと考えています。日常生活の中でちょっとした疑問も近くにいる村人ならすぐに聞くことができる。そんなネットワークがこの勉強会を開く理由の一つでもあります。

利用できる里山が急激に減少する中、危機感を抱く村人にとって、同じ村に苗畑があり、里山に林を育てている「実践者」がいることは、とても頼りになることと思います。新実践者が無償で村人に苗木を配ったという話もありました。また勉強会の参加者が、後日苗木の作り方を学びに来たという話も聞きました。

一人でも多くの村人が、樹木を育てることを、日常の一コマに加えてくれたら、この活動の意義が証明されるということでしょう。

ファナの苗畑事情

ここ数年、地域苗畑からよりも実践者や新実践者から苗木を購入して、村人に配布しています。村では苗木のポットにリサイクルする水の袋やイーストの袋が手に入りやすいのですが、サヘルの子が配る以外に自分で袋を探してきて大量の苗木を育苗する新実践者もいます。中には数千本の苗木を育苗する強者もいます。

サヘルの子がご購入する苗木は1回に100~300本。多くの苗畑から購入してあげたいので、苗畑当り1年に数回ですから、苗木1,000本も買えば結構買ったことになります。そのため「サヘルの子はそれほど買えないからね」と毎年念を押しています。

それでも、実践者たちが苗木を大量に作るのはなぜなのでしょう？もちろん、自分の里山に植林するためにたくさんの苗木を植えています。それでも1年に植えられるのは1,000本くらいでしょう。ではどうしているのか？

ファナ地域では土地の分譲が進んでいます。バマコの住民は、灌木を伐り払って、畑にしたり、ユーカリを植えたりしています。その苗木を実践者たちの苗畑から買って行くのです。バマコ・マナーは農村の経済からすれば膨大です。数haの土地に（村人を雇って）1,000本植えるなどと言って、買って行くそうです。



新実践者の苗畑

■新実践者 2023

第3期となる2023年の新実践者は、17カ村20名の候補者の中から、5名が選ばれました。彼らは、スタッフや実践者たちのサポートを受け、初めての苗木作り・育てた苗木の植栽を行いました。

皆さんに教えていただき、自分で苗木が作れるようになりました。

樹木をたくさん植えるために、農場を広くしました。

① ドリッサ・ジャッコさん(ダンガチヨロ村)

僕たちも苗木を植えるのを手伝っています。

② アダマ・フォンバさん(タンナコレカブグー村)

苗木ポット用の袋は、村で手に入りにくいので、サヘルの森が用意してくれるのはありがたい

農園はジーシラ(雨期の水の通り道)にあるので、樹木の生育が良いです

金網が垂れないように、木で支えます

③ジャン・クリバリさん(バゲブグー村)

育てた苗木を植えて育てます。

苗木が欲しいという人には
無償で苗木を渡しています。



息子が不在の時には私が水やり
をしています。



苗畑主になって、苗木を育てたいです。

④セイドウ・クリバリさん(パサマナ村)

ユーカリの移植がうまくいかず、
教えてもらってできるようになりました。

柵の内側にユーカリを
植えています。



⑤セーク・クリバリさん(コニ村)

給水塔から配管された水(有料)を、樹木の灌水にも使っています。

農園を拡大して、柵の内側に樹木を植栽しています。

野菜を栽培して、近くの市場で販売しています。



試験地の取り組み

2019年から新たにカソマブグーへ試験地を設置して、植生回復や在来樹の育成の技術を開発してきました。

中でも在来種のチャンガラ直播は多くの種子が発芽し、生育は遅いものの順調に育っています。



試験地Cで育ったチャンガラの実生



チャンガラの育苗試験

今年は、**菌根菌**(植物の根に共生して生育を助ける菌)の接種を期待して、チャンガラの成木の根元の土を育苗培土に混ぜ、チャンガラの苗を試験的に育成しています。植栽後の生長を担保するためにも、チャンガラの**大苗**を育てることも試しています。

■里山よもやま話

金網の普及

ファナ地域で近年家畜除けの柵に金網を使用する人が増えました。以前の金網は海外からの輸入品で高価であったため、とても手に入る代物ではありませんでした。十数年前頃から国内産の金網が出回るようになり価格もかなり下がりました。

金網は針金と専用の手動の機械を導入すれば生産できるので、小さな町でも工房を立ち上げられます。ファナ地域ではファナの町ではもちろんのこと、週に1回の市が開かれるような小さな町、新実践者たちの村の近くでいえばティンゴーレなどにも工房ができ、非常に手に入れやすくなったことも、村人たちが金網を利用する理由の一つと言えます。



小さな町にある金網の工房

これまでの灌木の枝を利用した柵から、耐久性のある金網に移行すれば、材料を採取していた周囲の灌木林の疲弊も緩和されます。

女性たちの苦悩

日々の煮炊きに使う薪を里山で伐り出し運んでくるのは女性の仕事です。近年の都市人口の増加もあって、農村部の里山から薪炭材が伐り出され、薪や木炭として都市に運ばれています。また農村部でも人口が増え、農地への転換や薪炭の消費も増えて、里山の疲弊がますます進んでいます。

さらに、ここ十年で都市住民への土地の分譲が一気に進み、村周辺の里山が個人所有となり、そこからの薪炭材の採取ができなくなりました。カソマブグー村では周囲に里山が広がり、以前は村から歩いてそれらの里山で

薪材を伐り出していました。しかし現在では村周辺の里山も分譲され、10 kmほど離れたコニ村のほうまで、ロバ車を使って伐り出しに行くようです。雨期には草が生え、毒蛇など危険な生物もたくさんいるので、乾期にまとめて伐り出し、家の脇に積み上げて保管しています。



家の脇に山積みされた薪材

勉強会には多くの女性が参加し、苗木の育成や、樹木の植栽などを学びました。その背景にはこうした薪炭材の入手の困難さがあり、自分たちで樹木を育ななければならないという危機感があるのもうなずけます。

義父の遺志

カソマブグー村の勉強会に参加したアミナタ・ジャラという女性がいます。3月に行った育苗の勉強会、5月の乾期植栽の勉強会の他、実践者のバルーさんの苗畑にも顔を出し、苗木の作り方を熱心に学んでいました。



バルーの苗畑で鉢上げを学ぶ

彼女の義父は、カソマブグー村の実践者でもあるバーバ・ジャラさんです。彼は実践者として研修を受け、学んだ接木の技術を使って、ズィズィフィスの改良種を育成しました。その果実は近くの市場に出荷され、評判となり、ファナの町からも商人が買い付けに来るほどでした。果実を売ったお金でロバ車を購入したり、灌水のための井戸を掘って、ズィズィフィスの畑を拡大したり、非常に仕事熱心な老人でした。



バーバさんとズィズィフィス改良種

しかし、ここ数年は足を悪くして動けなくなって、畑仕事にも行けなくなり、今年になって他界されました。バーバさんには息子が一人いますが、長いこと体を悪くして畑仕事ができず、また子供たちもまだ小さいので、妻のアミナタさんが家族の仕事を一身に背負っています。

このような家庭の事情もあり、アミナタさんがバーバさんの後を引き継ぎ、ズィズィフィス改良種の畑などを管理するのは難しいと私たちは考えていました。しかし、彼女は「義父の残した畑をこのまま荒れさせてしまうのは忍びない」と一念発起して勉強会に参加したのでした。それ以来、勉強会以外にも、実践者のバルーさんのところで育苗や樹木の育て方を学んでいます。

育成中のチャンガラの評判

カソマブグー村では、よく知られていない在来種の育成方法を開発しています。特にこの地域で薪炭材として最良とされるチャンガラ (*Combretum spp.*) を育成できないか様々な方法を試しています。

最初はチャンガラの苗木を作ろうとしまし

たが、発芽をしてもすぐに枯れてしまうために、試験地に直接播種してみたところ、多くの実生が育ちました。それを見たカソマブグー村のイマーム（イスラム教の導師）は、「村の周辺では私たちが利用できる森林が少なくなり、日々の薪炭材を得ることが難しくなっている。サヘルの森がチャンガラの林を育てているように、私たちが同じようにチャンガラを育てなければならないのかもしれない」と危機感を吐露していたそうです。



樹木の育成には放棄畑の活用も重要

また、試験育苗中のチャンガラの苗を見た隣村の男性は、「チャンガラの苗木を初めて見た。私たちが畑でミレットやトウモロコシを栽培するように、この先、チャンガラのような樹木を栽培していかなければならないのかもしれない」と非常に驚いていました。



育苗したチャンガラ苗の定植

チャンガラの試験育苗のために苗畑の一角を提供してくれている実践者のバルー・ジャラさんは「自分もチャンガラの苗木を育成して、畑にチャンガラの林を育てたい」と夢を描いています。

マリでも、今年は異常気象のニュースが巷を賑わせています。

3～4月にはバマコでも連日40度を超えて、中には気温48度を記録した地点もあったとか。バマコの病院でも多くの方が亡くなったそうです。人口増加による電力消費の増加や燃料の高騰などもあり、バマコでは計画停電となり、この酷暑に追い打ちをかけています。電力不足の解消のため、ロシアからの支援により太陽光発電の計画も進んでいるようです。

雨期に入ると今度は洪水のニュースが聞かれるようになりました。バマコだけでも100件以上の洪水が起こり、マリ全土では4万人以上の人々が洪水の被害を受けました。近年森林の減少により、降った雨が一気に増え、洪水を引き起こしているように感じます。暫定政府は「国家災害事態」を宣言して、被災者の保護・支援に努めています。



Information

募金・カンパにご協力下さい

日頃からサハルの森の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。

マリ国内は、治安の不安に加え、今年は高温や洪水のニュースなども聞かれました。厳しい環境に変わりありませんが、里山に目を向けると、その疲弊は加速し続け、人々の日常生活に影響しています。マリ人スタッフを初め、実践者や多くの協力者によって活動は続けられています。彼ら自身でその生活を守っていく活動に、ご支援いただけますよう、お願いいたします。

会員募集中

サハルの森に入会されますと、年数回、機関紙『サヘル』のほか、報告会等のお知らせが届きます。

一般会費	年	5,000円
維持会費	年	20,000円

サハラ砂漠南縁・サヘル地域での里山再生活動を継続的に支援いただくためにも、ぜひご入会下さい。

募金・入会のお申し込みは…

振込用紙に

- ①住所
- ②氏名
- ③電話番号
- ④送金内訳(会費、募金など)
- ⑤領収書の要不要

を明記の上、郵便振替で下記口座にお振込みください。

【郵便振替口座】

00170-6-115054

サハルの森

*当会への寄付は所得税の控除になりません。ご注意ください。

特定非営利活動法人 サハルの森

〒194-0013 東京都町田市原町田1-2-3 アーベイン平本403
 TEL:042-721-1601(留守電対応) FAX:廃止しました
 ホームページ: <http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>
 E-mail: sahel-no-mori@jca.apc.org

機関紙『サヘル』ファナ特集号

発行:2024年9月30日
 発行人:高津 佳史
 編集:榎本 肇